

聖書：コリント人への手紙第一 11：27～34

説教題：自分自身を吟味して

日時：2022年10月23日（朝拝）

コリント教会の聖餐式と関連して生じていた問題についてパウロが語っている箇所の最後の部分となります。コリントでは聖餐式が信者同士の自発的な食事会である愛餐と一緒に行われていたようです。しかしその集まりが良いことにつながらず、かえって害をもたらしていました。その集まりでは分裂が生じていました。それは社会的・経済的に富む人と貧しい人との間の分裂でした。特に問題となっていたのは、富んでいる側の人たちの行動でした。彼らは教会の集まりを私物化し、自らが楽しむ場としていました。愛餐の席で我先に！と食事をし、自分の親しい人たちと楽しむことに重きを置いていました。そんな中、貧しい人たちは、その日の働きを終えて到着しますが、するとそこにもう食べ物はありませんでした。一方にはお腹一杯に食べて酔っている人がいれば、一方には空腹のままの人たちもいる。こうして貧しい人たちが恥ずかしい思いをさせられているのを知って、パウロはそれは神の教会を軽んじることだと言ったのです。またそれでは主の晩餐を守っていることにはならないと。

そこでパウロは前回の 23～26 節で主の聖餐式制定の言葉をもう一度コリント人たちに思い起こさせました。聖餐式は何よりもキリストの十字架の死に焦点を当てるものです。その死は私たちの身代わりの死です。その尊い主の犠牲を感謝して、主を愛し、主に再献身する時です。また聖餐式は旧約から約束されて来た新しい契約が実現したことを祝う契約的食事でもあります。主が生み出してくださった一つの民の交わりを喜び、尊ぶ時です。これらのこととコリント人たちの聖餐式は全く一致していませんでした。この基本にもう一度立ち返ることによって、あるべき状態に戻って行くことをパウロは願って語ったわけです。

「したがって」と今日の 27 節は始まります。「もし、ふさわしくない仕方でパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すこととなります。」聖餐式は主の死を覚える重大で厳粛な式ですので、ふさわしくない仕方で行えばただでは済まされないということになります。それは主の身代わりの死を軽んじ、主ご自身を冒瀆する行為となるからです。

では「ふさわしくない仕方」とは具体的にどういうことなのでしょう。ここはよく聖餐式の時に読まれる言葉です。しかしここだけを切り取って読まれることが多いため、本来の意味が考慮されない危険があると思います。「ふさわしくない仕方パンを食べ、主の杯を飲む」と聞いて私たちはどういうイメージを持つでしょうか。おそらく多くの方は、神の前での個人的生活のことを考えるのではないかと思います。特に過ぐる一週間、あるいは一か月の自分の霊的状态、道徳的生活を振り返りながら。

しかしこの箇所ですら実際に考えられていることは何でしょうか。問題にされて来たのは自分勝手な飲食です。他の兄弟姉妹を顧みない自己中心的食事のことです。兄弟愛また隣人愛に生きていないことです。ですからそのことこそを検討してみなければ！ということになります。自分は自分のことばかり考えて他の人のことを無視していないか。思いやりを欠けた行動を取っていないか。恥ずかしい思いをしている人たちをそのままの状態に放置していないか。そういうことをしておきながら聖餐式にあずかることは主に対して罪を犯すことだと言われているわけです。もちろんその根底にあるのは主の十字架に対する無理解と言えます。主の十字架が本当に分かり、感謝するならば、その感謝は兄弟姉妹との交わりに現れ出るはずで、互いにあわれみ深くなるはずで、なのにそれがないということは本当に主に感謝してはいないということになります。正しい態度で聖餐式にあずかっていないということになります。

ですから 28 節でパウロは「自分自身を吟味せよ」と言います。これは自分自身をテストしなさい、自分自身を試しなさい、自分自身を点検しなさいという意味です。しかしこれは自分をテストして、自分は良くやっている、合格だ！と判断したら、聖餐式を受けられるという意味ではありません。聖餐式は立派に歩んでいる人のためのものではなく、罪人のためのものです。大切なことは自分自身の生き方を主の前で真摯に振り返ること、そしてもしそこに正しくないものがあるなら悔い改めて、主の恵みによりすすむこと。罪の赦しを求め、恵みをいただいて正しい生き方へ進めるように祈ることです。ですから自分を吟味して自分がふさわしくないことを認め、心砕かれて主の前にへりくだる人こそ聖餐式を受けるにふさわしい人ということになります。これについて有名なウェストミンスター大教理問答問 172 は「自分がキリストにあること、あるいは自分のなすべき準備について疑っている者が、主の晩餐に臨んでもよいか」と問い、それに対して「キリストにあるのを認められて不義を離れたい、と偽りなく望んでいるなら」良いと述べ、さらにこう語ります。「(弱く疑い深いキリ

スト者たちの救いのためにも、約束がなされ、この礼典が命じられているのであるから)、彼は自分の不信仰を嘆いて、疑いを解くよう努力すべきであって、そうするならば、彼はさらに力づけられるために主の晩餐に臨んでもよいし、臨まなければならない。」

なお 28 節に「だれでも、自分自身を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい」とあるのを読むと、自己吟味は聖餐式にあずかる前段階のプロセスとしてだけ言われているようにも読めますが、「そのうえで」と訳されている言葉は「そのようにして」という意味の言葉です。ですからこれは聖餐式にあずかっている間も！ということになると思います。聖餐式にあずかる前に自分を吟味し、その試験をパスしたら、あとはそれを経た者としてパンを食べ、杯を飲むというのではなく、聖餐式にあずかる最中も自分自身を吟味し、ひたすら主の恵みに信頼しながら、聖餐式によって自分が強められることを願いつつ、この礼典にあずかるべきなのです。

さて 29 節には、聖餐式の意義をわきまえないで食べ、飲む者は自分自身に対するさばきを食べ、飲むことになると言われます。これは 27 節で言われたことの当然の結果と言えます。主ご自身を軽んじて、主のからだと血を表すパンと杯を食べ、飲むならば、それは自分自身へのさばきを食べ、また飲むことになる。実際、コリント人の間には、このさばきが現れていたことが 30 節に記されています。彼らの中にはこのために弱い者や病人が多く、死んだ者たちもかなりいました。このような主のさばきが臨んだケースとしては使徒の働き 5 章に出て来るアナニアとサツピラの事件があげられます。彼ら夫婦は聖霊を欺いたために、その場で直ちに死んでしまいました。このことによって教会全体と、これを聞いたすべての人たちに大きな恐れが生じました。神のさばきは最後の日にしか下らないものではないのです。今日も、私たちの日々の生活のただ中に下り得るのです。もちろん私たちはここから逆に、弱い者、病気の人、また死んだ人がいたら、それは聖餐式を軽んじたからだとか、神のさばきの御手だ！と軽々しく言うてはなりません。イエス様はヨハネの福音書 9 章 3 節で、そのような単純な見方を否定されました。パウロがここでこのように言ったのは彼が使徒であることと関係していると言えます。彼はコリント教会にこのような者たちが多くいるのは、そのためかもしれないというような弱い言い方はしていません。そのためです！と断言しています。これは使徒ではない他の誰が言えることでしょうか。ですから私たちは自分勝手な思いで軽々しく人に当てはめてはなりません。しかし一方で、こう

ということが今日も現実にあるのは本当です。ですから私たちは正しく恐れるべきなのです。

それを避ける方法は自己吟味です。31 節に「しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません」とあります。自分で自分を検討すること、自分で自分をさばくこと、すなわち悔い改めること。そのようにして主の前に正しいあり方へと立ち返るなら、この種のさばきが下ることはありません。

パウロはこのさばきについてもう一つの言葉を 32 節で加えます。すなわちそのさばきとは永遠の滅びのことではないということです。それは主の懲らしめである。むしろそれは永遠のさばきに至らないようにするための神の愛のわざであるということです。5 章 5 節でも似たようなことが言われました。そこではサタンに引き渡す、すなわち除名にした人のことが言われましたが、それは「彼の霊が主の日に救われるため」と言われていました。教会戒規の最も厳しい処置さえも、その人の救いを祈り願って行うものであるということでした。ある人はここで、「体が弱くなったり、病気になることに神の懲らしめの意図があり得るとするのは理解できるが、死んだ人についてはどうなのか。死んだら終わりではないのか。悔い改めるチャンスもなくなるのではないか。」と思うかもしれません。しかしここでは死さえも永遠の滅びに至らないための主の懲らしめであると言われています。死の瞬間に何が起きるか、私たちには分かりません。その最後の最後の瞬間における悔い改めもあり得るといことなのでしょう。私たちはここに、このようなことが起こっても、なおそこに主の愛の意図があり得るのだと知って慰めを受けます。しかし一体誰がこのような懲らしめを受けたいと思うでしょう。主は私たちが最後のさばきにおいて永遠の滅びに至らないように、私たちが悔い改めない場合、このように懲らしめる場合があると聖書は告げます。ですからそうならないため、自分自身を吟味することが大事になって来ます。自分をわきまえて、そうならない道に行くようにと勧められています。

最後 33～34 節は結びの言葉です。33 節に「ですから、兄弟たち。食事に集まるときは、互いに待ち合わせなさい。」と言われます。コリント人たちは我先にと、後から来る人たちのことはお構いなしに自己中心的食事をしていました。そのようにはせず、互いに待ち合せなさいと言われています。これは単に時間的に待つことだけでなく、互いに歓迎し合うこと、受け入れ合うことを意味する言葉であると述べる学者もいま

す。この世の社会的な貧富の差をそのままにするのではなく、みなで分かち合って食べるのです。主にある一つの民の交わりをとともに喜び、尊ぶ仕方です。

最後の34節には「空腹な人は家で食べなさい」と言われます。それは「集まることによって、さばきを受けないようにするためです」と。コリント人の特に裕福な人たちは公私を混同していました。教会の集まりを私物化し、教会を自分の日常的欲求を満たす場としていました。そのため、他の人のことが二の次、三の次となっていました。そうして神の教会を軽んじることにより、さばきもたらされていました。そうならないように空腹な人は自分の家で食べよ！と言われます。いわば公私の区別です。それは教会では教会のすべきことに集中するためです。自分の欲求を満たすことで頭が一杯になり、他の人のことが見えなくなないように。むしろ教会では主を賛美することに第一の思いを向け、また主が生み出してくださっている兄弟姉妹の交わりを楽しみ、互いに建て上げ合うことに関心を向けるためです。「このほかのことについては、私が行ったときに決めることにします」と言って、この話は結ばれています。

以上、コリント人は一言で言えばこの世の価値観をそのまま教会に持ち込んでいました。社会で上流階級にいる人は教会でも上流の人らしい食事をして当然。社会で下流に属する人は教会でもそれなりの食事となって当然。知恵や知識のある人は教会でも高い地位を占め、それなりの待遇を受けた当然。貧しい人たちは教会の集まりで多少卑しく扱われてもやむを得ない。それは世の中でも普通のことであると。そうして教会の中でも社会的な分断が現れることを許容していました。しかし主の前でそうであってはならないということです。主はご自身の十字架の死を通して一つの民を造られました。誰も主と主の十字架の前で特別な人はいません。みな同じ罪人です。誰一人として自分を主張できる人はいません。みなただキリストに感謝するのみです。そういう者たちをキリストはご自身の御国の民の一人としてくださいました。一人一人キリストが愛し、大切にしている人たちであり、平等です。私たちはそのキリストを主と仰ぐ民として主が与えてくださっている兄弟姉妹、主の民一人一人を大切に考えているでしょうか。ある人に恥ずかしい思いをさせて、そのままにしていることはないでしょうか。8章11節では、弱い兄弟のためにもキリストは死んでくださった！と言われました。その視点をもってキリストが大切にしている人を愛おしく思い、その益に自らが仕える歩みを祈り願っているでしょうか。私たちは自分自身を吟味し、もしふさわしくない自分があることを思うなら、主の十字架のもとで悔い改める者とさ

れたいと思います。そして特に聖餐式を通して悔い改めの生活をより良く導かれ、主の恵みを豊かに受けて、主が与えてくださっている一つの民の交わりを喜び、尊び、主の死を告げ知らせる神の教会の特権ある証しの歩みを導かれて行きたいと思いません。